

二〇二四年一〇月一八日

蒼天へ秋風描く羊雲
静けさや秋気溶け入る禪の庭
牧柵の途切れてポプラ秋の風
ひんがしの山まで染めて秋夕日
広芝に大の字となり秋の人
オブリエとも生け花展は秋催ひ
故郷の香りを載せて林檎来る

二〇二四年一〇月一七日

里山の森に木霊す添水かな
大病に克ちたる友と星月夜
秋天へ本茅葺のうだつかな
杉落葉しがらみとなり飛鳥川
芋の露小さき宇宙を閉じこめて

二〇二四年一〇月一六日

収穫を終へたる村の秋ともし
秋さぶや古りしサイロの赤煉瓦
日に透けて軒端彩る吊るし柿
徳利の底でうべなふ温め酒
後の月隠して雲の華やげり
アトリウムチェロの響きて秋気澄む
炊き上がる新米の香に目覚めけり
佇めば呂律を奏づ秋の川
夫の忌を修せば秋の深まりぬ
雨戸閉ず月に別れを惜しみつつ
御旅所の籬となりて曼珠沙華

二〇二四年一〇月一五日

客人を見送り仰ぐ十三夜

明日香
山椒
むべ
はく子
康子
たか子
きよえ

みきお
千鶴
明日香
明日香
やよい

風民
むべ
みきえ
ほたる
やよい
康子
ほたる
明日香
たか子
あひる
よし女

澄子

おしゃべりの喉を潤す蜜柑かな
山寺の回廊にさす紅葉影
三栗のいつも押されてる真中
弟妹の一人かけたる十三夜
四ツ辻は殊にゆるりと秋祭り
掘割に桜紅葉の散る夕べ
畦道へ触るるばかりに豊の秋
万葉歌碑巡るサークル秋澄めり

二〇二四年一〇月一四日

そつと手をさしだしつなぐ虫の夜
号砲は村の鎮守の秋祭り
芒原あかがねに染む落暉かな
大原女の過ぐれば菊の香りけり
福耳のはみ出す帽子小春風

二〇二四年一〇月一三日

松手入女庭師の赤鋏
秋天の高さ広さよ鳶一羽
御朱印に列なす人や初紅葉
海峡に水尾幾筋や秋澄みぬ

二〇二四年一〇月二日

きよえ
もとこ
風民
ほたる
たか子
幸子
明日香
やよい
なつき
よし女
むべ
智恵子
みきお
たか子
むべ
山椒
千鶴
千鶴
千鶴
なつき
むべ
明日香
澄子
澄子

毎日句会みのる選・二〇二四年一〇月二〇日